

冬の月按摩の宵のいと涼えて
 道端にいと枝ほしき熟柿かな
 朝寒や寝巻一とつで置手
 霧暗れて眺め氣高し不二の山
 昔戀し田面の里に雁の聲
 月にとて取残したり柿三つ
 朝寒や八手の花は眞白にて
 藪かげや芋の葉やせて蔓珠沙華
 蓮の實や飛で淋しき草の中
 豆柿や百文づゝに束れたる
 朝寒や顔も洗はぬ舟の窓
 蜻蛉や魚のはねたる水の上
 雁風呂の肩丈け寒し松の風
 夜や寒し露酒に足らぬ思ひかな
 ちまくと瓜の花咲く殘暑かな

三光

天、朝寒や落ちる木の葉も昨日より 菊玉 白醉樓
 地、月の夜に五戸の礎や五戸の村 大分 春 月
 人、菊の香や天長節の物静か 長野 曉 霞
 追加 鹽野奇零
 朝立の峠三里や霧深さ
 勝菊の高き譽れや世界一

虫聞くや夜毎憂き喪に籠りつゝ、
 板橋の落ちたまゝなり秋の川
 薄暗さ月の戸口や雁の聲
 菊の香や菊の十句に酒の味

同窓會

小林雨峰

八月〇日〇時より町の小學校に同窓會が開かれ
 ると云ふので、此日自分は姪に當るふみちやんと
 云ふ今年十五になる補習科の生徒を連れて、同窓
 會の式場にと臨んだのであつた。

この小學校と云ふのは、元は尋常校の校舎であ
 つたのを、尋常校の方が別に改築されたので、
 高等科の學校に引直して、今歳の春から引移たの
 である、二十年前に建築された建物であるから、
 見るからに古びた造作、處々修繕を加へた言はゞ

縫ひ合せた綴ち合せた古着のやうな家屋

併しこの古着のやうな建物ではあるが、自分に
はもう何とも云えない感じがした、二十年前の自
分が如めてこの學校に足踏みしたときはそんなで
あつたか、小はげな身軀に取ては大きな建物であ
つたのが、今見ると小さくなつた様に見えたり、
また其の時分の先生は今はどうしたかしらん、小
はげな机を並べて居つたときの、八重ちやんや、
重ちやんなんと云ふ友達の人はどうしてしまつた
かしら、杯と云ふ感じかしてくるとまた死んだ友
達のとだの、二階の窓から墜落して怪我した人の
とだの、自分が學校で麻疹を煩ふたときに、世話
して呉れた人のとだのが、目に髣髴としてきたの
である、此の時に當つては誰れでも、自分の年が
老けたには氣が付かずに、全く昔しに返つたや

うな氣がするのである、自分は父に早く死にわか
れ十三の時から、他郷流寓の客となつて、全く母
校のやうすなぞには頓と氣がつかなかつたのであ
つたのが、今此に来て見ると、一草一木も何だか
『よくきたのね』、と囁くやうに見え、戸障子の如
きものまでか、歓迎してくれるのではないかと思
はれて堪らなくなつた、

姪のふうちやんは、自分が沈み勝ちに爲つて考
ひ込んで居るものだから焦慮がつて、

『運動場の方にみんなが集まつて居るから行き
ませうさあ』

と手を取るののである、自分も不圖思ひ付たやうに
『種々と考へて居つたものだからね、さあいき
ませう、お友達も今日は澤山来て居るんでせう』
『今年は屹度來る人が多いでせうよ、あら武田

さんも中川さんも皆んながきました、私は皆の方へゆくよ、叔父は獨りで男生の方へいらしや

いな、歸りにはまた一緒に行きませすから」

姪はすたくと、運動場の方へ驅けて行つた、自分はそのりと、教室を一々見て歩いた、標本室には大分機械や參考品やらが并んで居る、ずつと昔にいちくり返した機械はその儘である、向ふから二三の洋服やら袴の若い連中がやつて來た、知つて居る人もあるが、知らない人もある、知つて居る人と知つて居らない人とを問はず、皆な是等がこの母校から出た人だと思ふと、何れも懐かしいのである、これからずと運動場に行った、花の如き淑女、玉の如き青年、何れも今日を晴れと盛裝して、彼處でも此處でも遊んだり話したり、奇麗な花を手折つて持つて居る少女は神使の如く

「ボールを手にして走つて居るのは天童の如く何れを何れと分ち兼ねるが、何れもこの母校に來つて昔日の夢を繰り返へして、嬉々たらざるはないのである、繪はがきの展覽會やら、氷店、菓子店の設けやら若き人々の手に成つた仕事としては洵に行届たものである、一人の青年は、

「これが獨逸から送つて來た繪はがきですか」と打眺めて居る、それは同じ此の學校から出て今獨逸留學の人となつて居らるゝ山田君からののがさを見たので、半ば羨むが如く、半ば喜が如く隣りの友人の肩に手を掛けて言たのである

「君は高等學校の方を卒業なされたさうですな」などと一人の地方中學生徒は語る、やがて一時のベルが鳴つた、

チャン／＼／＼、チャン／＼／＼

あゝ、このベルがとまた自分は昔日授業時間の報鐘として耳にきき、馴れて居つた此音をきいたので何となく、また生徒にでもなつた気がして、皆なの者と三階の式場へと詰め懸けた、

花瓶に挿れた麗はしき花にて飾られたる演壇の正面から左は來賓が五六十人右は地方委員、また左の方は女生席でそこに七十人許り、右にはまた男生席それに百二十三人それがみな、行儀よく列席して、それから幹事の報告だの議事だのと例の如く式を了つた、次に演説となつたが、來賓中の班白の老先生が登壇した、これはこの地方の私立中學を建て、居る名望家の一人として知られた人であつた、此の人の演説は時節柄有益な武士道と云ふやうなものであつた、話しが六かしいのであつたか、聴く者は早や飽きがきて式場も少しく騒しく

なつてきたが、聴てそれがふ了いになつた、次に自分の番であつた、がしかし、自分は感に堪えないので、他の人に順番を譲た、それで一番年効あるこの學校の老先生尤も去年他校の校長に轉じたとか云ふ、先生が壇に上つたのである、年はもう五十に近いらしい、粗朴な扮装で、

『私は毎年この同窓會に臨みまして、珍らしい話もないのです、また年中同じををして居る人ですから、改まつた感じなぞもないのですが、只、無事で居りますと云ふを端書で申上げます代りに、こゝに登つたのです……』

其の口調は滑らかではないが、重みある辯で、それから、この先生が明治十八年から、この土地の學校に来て教鞭を取つて居つたことから、教えた人は老ばれていきますが諸君が成人してゆくのが唯

一の樂みである、述べられたのには、自分も實に感激して郷先生なるもの、恩澤を忘るゝとが出来ないのである、郷先生は一郷の大恩教主であることは決して忘れてはならぬ事なのであることを自分は深く覺つたのである、やがて今度は自分が愈々演壇に登つて感謝の詞と感慨の意を陳べねばならぬ事となつた、漸く落付いて演壇に登つた、がしかし、自分は一郷に對して誇るべき何事をもして居らない、また郷里に取りては、どれ程にも認められて居らない、云は、一介の窮措大であるから、實に慚愧なのである、併し思ひ切つてこう云ふを述べた、それが自分の信念から進ばしつたのである、

「人と云ふものは予か今母校に來つて母校を懐かしく思ふやうな心情を以て世の中に處すべき

である、それで自分には常に二つの故郷があると思ふて居る、肉身を享けた父母の國と、生活を營むでゆく社會と云ふ故郷とであります、それが平生社會の家に出了ときは、それを故郷と思はぬものであるから、種々な邪な心を起すやうになる、墮落して第一の故郷に面が合されなくなるのである、そうして、第一故郷にあるやうな温かな風はなくたい冷めたい社會の浮薄な潮流に捲き込まれて、第一の故郷にて訓化されるなどとは實際に行はず、また世人に對しても社會の成り行に任せる方がよい道德的ななどは當節は流行ないと云ふやうになるのである、自分がかゝる風潮に遇ふたことがあるが、そんなことが道理でつまり悪俗に染むのが眞理であるならば自分は第一の故郷にありて訓化されたことが悉か

り僞りであつたと断定せなければならぬ、そんな筈はない、第一の故郷で温かな訓化のもとに養はれたものは、其の心をもつて世の中に一生を通さなければならぬ、故に社會と云ふ故郷から常に第一の故郷をふりかへつて見たとき冷めた元と異つた心持をもつて居つてはならぬ、生れた故郷に對しても社會と云ふ故郷に對しても常に同一の心情でなければ、生れた故郷に老いても故郷の眞の味を知らず、また社會の故郷にありても淋しい生活をしなければならぬと思ふこれが私の處世論で……」

と云ふ様な意味から、人は學問を修め業務を勵むのは米を搗くの糠を得るのが目的でないと同じだと云ふ例を擧げて功名權勢の糠を得んしてはならぬ、人の本務が何であるかを自覺して勵まなけ

ればならぬと云ふを滔々と辨したのであつた、然し自分は殆んど感覺が嵩して來たので遂に一貫して陳られなかつた様な氣がしたのであつた、夫から演説は拍手のうちに終り次に生徒の催しになつた、福引だの三分演説だの餘興があつたり、辨當が出たり、随分賑やかな同窓會であつた、ところが此の同窓會の事を記して式場で配た最後の新聞、(と云ふても眞筆版刷のものではあるが)に自分の演説につきさて、

『某の演説に感激して幹事某は遂に卒倒するに至れり其熱烈の情は言外に溢る……』

とあつた、自分はたい人生問題に對して青春の壯年燃ゆるが如き情緒を有する人への注意にと思ふて實驗上の事を演べたのであつたが、かくも感動せしめたのであつたかと、自分ながら涙に咽んだ

而してかの少年なるものは煩悶堪えなかつたのであつたが遂にその煩悶から脱するを得たとの事であつた、多少病的の傾向があつたのであつたとかであるが、

あゝ願くは自分は四十五腰に梓の弓を張り、白髮銀を頂くの時代がきてもこの小學校の同窓會に臨んで、小供になりたいためのである、無邪氣な大人として生活したいものである、と書き終つてまた遂に自分ばかりオーズオースの詩中の人となるを禁じえなかつた、

My heart leaps up when I behold
A rainbow in the sky;
So was it when my life began;
So be it when I shall grow old,
Or let me die!
The Child is father of the Man;
And I could wish my days to be
Bound each to each by natural piety.

空を眺めて虹見れば

われの心は躍るなり

幼稚き時もかくありき

老ても新くぞあらまほし

我は生きて何かせん

實に幼児は成人の父

造化を愛する心もて

世に在る日をば結はなん

(八月廿一日記)

桑港のわびずまお

と し 子

變成男子とは法華經の奇蹟、轉女成男とは彌陀の誓願とさげど、これはまたいかなることぞ、髣髴さぐるしき三十男、巾幗に覆面して、讀者にさみゆることの苦々しやと、仰せらるゝ方もあるでございませう。さあ御静かに遊ばせや。愚痴のやう